

派遣者番号	管R4K04	氏名	松尾 美希
研究主題 —副主題—	探究的な学習のプロセスにおける「個別最適な学び」と「協働的な学び」の融合 —思考ツールを活用した授業実践による検証—		
派遣先大学	玉川大学 教職大学院	指導担当者	山口 圭介
所属	教育庁指導部指導企画課	所属長	栗原 健

キーワード：探究的な学習 思考ツール 総合的な学習の時間

要旨：本研究の目的は、小学校の探究的な学習のプロセスにおいて、児童自らが思考ツールを選択・活用し、探究を進めていくことにより、個別最適な学びと協働的な学びの融合が可能になることを明らかにすることである。そのため、まず探究の概念に迫り、本研究における探究を定義した上で「探究的な学習」に求められるものを抽出した。次に、思考スキルや思考ツールについて先行事例等を基に整理し、それらが上記の二つの学びの融合の手掛かりとなる可能性を明らかにした。こうした理論的研究を踏まえ、第6学年の総合的な学習の時間における実証授業での児童の変容について検証した結果、二つの学びの融合の実現に思考ツールが有効な手立てとなることを結論付けることができた。また、教科の学習においても、探究的な学習において二つの学びを融合させていくには教科等の枠を超え、資質・能力を基盤とした教育課程の編成が不可欠であることが明らかになった。

探究的な学習のプロセスにおける「個別最適な学び」と「協働的な学び」の融合 —思考ツールを活用した授業実践による検証—

松尾 美希

1 研究の背景・目的

本研究では、小学校の探究的な学習のプロセスにおいて、児童自らが思考ツールを選択・活用し探究を進めていくことにより、個別最適な学びと協働的な学びの融合が可能になることを明らかにすることを目的とした。こうした研究課題は、次のような観点に基づいている。

第一に、探究的な学習の重要性が高まっていることである。VUCA時代の到来と言われる今日、児童には、答えのない問いを見だし、解決に向けて探究していく力が求められている。2022年6月に内閣府から発表された「Society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」において、教育・人材育成システムの転換の方向性として探究力の重視が述べられ、自ら学びを調整し、社会に生きる学びや試行錯誤を重ねながら、自ら課題を設定し課題に立ち向かう探究力を評価する必要があることが明示されていることから、その重要性は明らかであると考えられる。

第二に、2021年の文部科学省中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」において、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることの重要性が示されたことである。ここで、個別最適な学びと協働的な学びは、決して独立しているものではなく補完し合う状態、すなわち融合している状態を目指すものとして捉える必要があると考える。その際の手掛かりとなりうる要素を明らかにしていくことは、令和の日本型学校教育の姿をより明確にするものであると考える。これに関する先行研究である中山(2022)では、二つの学びをつなぐ方法としての自由選択学習、ICT機器、思考ツールの効果が立証されている。しかし、この研究では三つの手立てがあること、思考ツールの活用が1種類に限定されていることなどから、多種類の思考ツールを選択・活用することにおける効果を明らかにするという課題が導出される。これらのことから、本研究主題を設定した。

2 研究の内容・論文の章立て

上述の問題意識に基づいて本研究は、3章構成とした。理論的研究である第1章では、探究とは何かに迫り、その上で探究的な学習に求められる要素を明らかにした。第2章では、思考スキルや思考ツールについて先行事例等を基に明らかにし、個別最適な学びと協働的な学びの融合の手掛かりとなる可能性を明らかにした。さらに第3章では、理論的研究を踏まえた下記の実証授業を組み立て、児童の変容について検証した。

3 研究の成果

(1) 探究・探究的な学習について

プラグマティズム哲学の代表的な思想家であるパース、ジェイムズ、デューイにおける探究の捉え方、PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)、IB(国際バカロレア)が考える探究の定義などを踏まえ、本論における探究を「自ら見いだした身近な疑問を明確なものにし、新しい深い理解を獲得するまでの途切れることのない過程を、よりよい世界と自分を結びつけながら主体的に追究し行動し続けること」と定義した。これはまさに「個別最適な学び」と捉えてよいと考える。しかし、この探究を学校教育現場で実践していくには、時間的な課題などを十分に克服することの難しさに留意する必要があるため、学習指導要領をはじめ文部科学省による資料には「探究」ではなく「探究的な学習」という言葉が使用されていると捉えた。その上で、各種文献や先行研究より、上記で定義した探究に近付けつつ、学校で行う探究的な学習に求められる要素として、以下の4点を抽出した。

①探究のプロセス ②概念的な理解 ③エージェンシー ④協働的な学び

さらに、総合的な学習の時間における探究的な学習に求められるものとして、以下の2点を見出した。

①学校全体で児童に育みたい資質・能力の明確化 ②カリキュラム・マネジメント

(2) 思考スキル・思考ツールについて

思考スキルについては、2019年に公表されたOECDの「ラーニング・コンパス」において「(メタ認知を

含む) 認知的スキル (批判的思考力、創造的思考力、学び方の学習 [learning-to-learn]、自己調整などを含む)、また、IBにおいては、思考スキルのサブスキルとして、批判的思考スキル、創造的思考スキル、転移スキル、振り返りまたはメタ認知スキルなど、と整理されている。加えて、2017年に改訂された「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」が位置付ける「考えるための技法」(いわゆる思考スキル) はさらに細かく示され、「考えるための技法」を指導する際には思考ツールの活用が考えられるとしている。

また、先行文献によれば、児童の実態や活動内容に合わせて児童自らが思考ツールを選択・活用すると、自身の考えが可視化され、友達に自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりし、自他の良さに気づき、新たな考えを生み出すことが可能になるとされる。さらに、思考ツールを媒介として、学校内外との協働的な取組につなげた事例等から、思考ツールのもつ、個別最適な学びと協働的な学びの融合の可能性を明らかにした。

(3) 実証授業について

これまでの考察で明らかにされた探究のプロセスのイメージを図1のように捉え、実証授業にて、検証した。

ア 対象

都内公立小学校第6学年2学級 66名

イ 実践授業

総合的な学習の時間

探究課題「伝統」(22時間)

ウ 分析方法

- ・事前事後アンケート調査
- ・ポートフォリオの記述及び面接法 (対象児童3名)

事前事後アンケート結果からは、図2等を用いて思考ツールの使い方を知るオリエンテーションと、学級全体で一つのツールを使って話し合う時間を1単位時間ずつ確保したことによって、思考ツールへのハードルが下がり自信がついたと答えた児童が多く、自分なりの思考ツールの選択基準をもつことにつながったことが明らかとなった。他にも思考ツールにより自分の考えが整理され、友達と話し合いやすくなったと感じた児童が増えたことが分かった。

また、ポートフォリオの記述及び面接法において、A児は多様な思考ツールを選択して思考を深めることで、概念的な理解を獲得し、地域の方との協働的な活動につなげていた。また、B児は他の思考ツールにはほぼ白紙の状態だったが、ピラミッドチャートには図3のように記述量が増加し内容の質も大きく向上した。自分の使いやすいように思考ツールの使い方を変えて活用したことから、個別最適な学びを自身で選択したことが伺えたほか、思考ツールを活用することで話し合いにも積極的に参加できたことが分かった。C児は、自分の考えを思考ツールにまとめた後、友達と話し合っただけでさらに考えを深めたいと思ひ、お互いの思考ツールを見合いながら新たな思考ツールの形を開発して思考を深めやすくていたことが分かった。これらのことから、思考ツールが個別最適な学びと協働的な学びの融合における有効な手立てとなったと結論付けることができた。

4 今後の展望

教科の学習においても同様に、児童一人一人の興味に基づいた探究テーマを、探究的な学習のプロセスを重視しながら追究し、個別最適な学びと協働的な学びを融合させていくためには、教科等の枠を超え、資質・能力を基盤とした教育課程の編成が不可欠であると考え。今後は、これからの学校現場に必要な、多様な学びを支える新たな教育課程はどのようなものか、という問いをもって研究を続けていきたい。

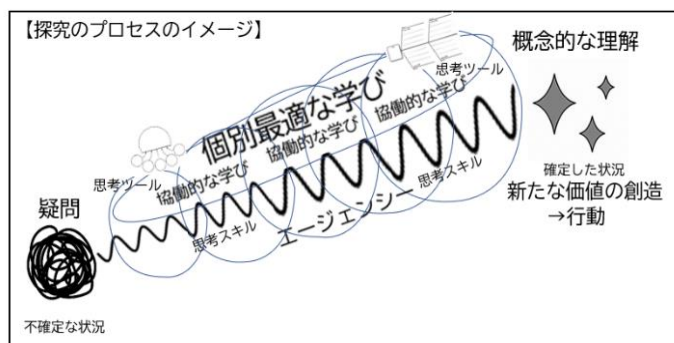


図1 探究のプロセスのイメージ (筆者作成)

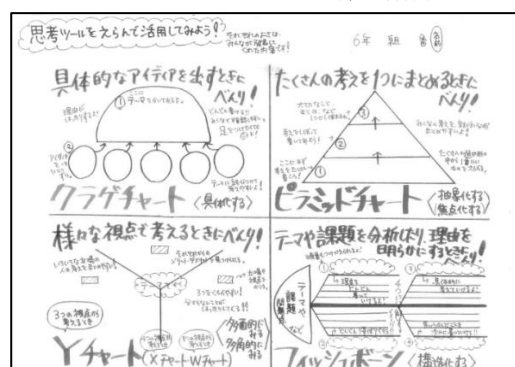


図2 オリエンテーション資料 (抜粋・筆者作成)

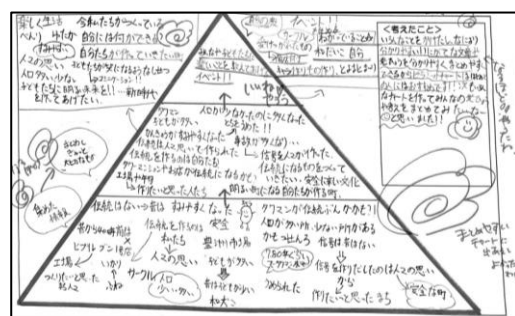


図3 B児によるピラミッドチャートの活用